

建学の理念

高木英明

はじめに

入学されてからほぼ二週間が経ちましたから、この学園にも少しは慣れてきたと思います。ですが、高校までの生活とはずいぶん勝手が違うと思います。授業は自分達で選んで、自分自身でカリキュラムを組むような形になっていますし、また授業をサボっても余り叱られることはありませんし、高校時代に比べればはるかに自由です。これは大学という所が学問の府であるということ、研究の自由とか学習の自由とかが強調されることから来る面もありますが、皆さんがもう大人に近い存在になったというこ

とから来ることでもあります。しかし、自由になるということはそれだけ自分自身で責任を負わなければならないということでもあります。今日のこの学長講話の時間もできるだけ多くの人達に聴いてもらおうという趣旨で、ほかの正規の授業は休講にしてあります。出席していない人が多いですね。その人達が、それなりにもっと有意義なことに時間を費やしているのであればそれでもいいですが、せっかく大学が提供しているものはできるだけ活用して、皆さんの成長の糧にして欲しいと思います。

さて、先程、司会の方が「総礼」(そうらい)という言葉を使われましたが、皆さんはそれをさっと漢字に置き換えて意味を取ることができましたか。日本語は漢字を思い浮かべないと意味が取れないことが多いですから、特に耳慣れない言葉を聴く時は、漢字を思い出せないとい何を聴いているのか分からないということになります。最近、多くの方がワープロを使うようになり、漢字を正確に覚えていなくても、ワープロが勝手に正しい漢字を書いてくれるので、漢字を覚えられない人が多くなっていると思います。私のような大人でも、漢字を読むことはできるのに、正確に書くことができなくなりつつあります。私は学長になってから講義をする機会が少なくなりました

建学の理念

が、学長になる前に主に教職科目や一般教育科目の講義を担当していた時、聴講している人達から、難しいとか、もっと分かり易く話して欲しい、とよく言われました。私としてはできるだけ易しい言葉を使って分かり易く話しているつもりなのに分かりにくいと言われるのは、私の専門分野の専門用語に固い難しい言葉が多いということにもよると思いますが、聴いている人が漢字を十分思い出せないということにもあったのではないかと思います。今日もできるだけ分かり易く話すようにはしますが、なるべく漢字を思い出すようにして聴いて下さい。

「総礼」という言葉は、私もこの学園に来て初めて耳にしましたが、儀式の前に仏様に向って行う御挨拶のようなもので、「朝礼」の「礼」と同じような意味だと思えます。また、先程、私は「総礼」の時に「三帰依文」という文章を読みましたが、これは簡単に言えば、これから私が仏様の前で宗教に関係のあるお話をさせていただきますと御挨拶をし、それを皆さんも読んで（読まなかった人が多いかもしれませんが）、皆さんは仏様の前で私のお話をよく聴きますという御挨拶をしたということです。このほかに、仏教用語には漢字の普通の読み方とは違った読み方をするものが

少なくないので余計に分かりにくいということにもなりますが、次第に慣れて行けば理解できるようになります。

この大学では、一年間に四回「宗教講座」が開かれ、皆さんはそれを聴かなければならないことになっていますが、そのシリーズの前に、最初に、学長が「学長講話」として宗教的なお話をすることになっています。では、なぜこの学園には、仏殿が飾ってあり、儀式の前には「総礼」という御挨拶が行われ、また正規の時間帯に「宗教講座」が開かれているのでしょうか。さらには、皆さんは最初のオリエンテーションの時に「仏教学」は必修として履修しなければならないという説明を受けられたと思いますが、ではなぜ「仏教学」は必修なのでしょう。その答はこの学園が「仏教系の学園」だからです。皆さんがこの学園に入学してこられた理由にはいろいろなものがあるはずですから、受験の前にこの学園について十分調べないまま入学してきた人もおられ、その人達の中にはこの学園が仏教系の学園であることを全く知らなかったという人もいます。

先日の入学式では、短大の人達には、短期大学の意味と短大での生活についてお

建学の理念

話をし、大学（文学部）の人達には、この演壇の奥に飾ってある「仏殿」の意味と人の生き方についてお話をしましたので、今日は光華女子学園の「建学の理念と仏教」についてお話をします。と言っても、私はちょうど一年ほど前に学長になったばかりで、未だ十分勉強ができていないわけではありませんから、所どころ間違ったことをお話しするかもしれません。これからは皆さん自身も仏教学や光華女子学園のことをいろいろと勉強することになるので、私のお話をよく聴いておいて、間違っている所があれば、後で直すようにして理解して行って下さい。

一、光華女子学園の建学の理念

「建学の理念」というと難しく聞こえますが、簡単に言えば、光華女子学園がどういう目的で造られ、何をしようとしているのかということです。これまでに書かれている文献や資料によりますと、光華女子学園は「仏教精神にもとづく教育」をしようとしていることがわかります。

「光華女子学園五十年史」(平成二年十月刊行、以下単に「五十年史」という本によって学園の歴史をたどってみますと、この学園は「東本願寺」に関係のある人達によって創設されたことがわかります。「東本願寺」については京都市出身の人や四月八日に本山参拝でお参りした人達にはすでに分かっていることであり、後でも説明しますが、京都駅近くにある大きなお寺で、浄土真宗(大谷派)という宗派の総本山です。そこのお寺の一番上位のお坊さんを「門首」(かつては「法主」と言い、その奥方を「お裏方」と呼びますが、昭和の初め頃(昭和十三年頃)に当時の大谷智子(さとこ)お裏方(昭和天皇のお后)現在の皇太后の妹君に当たられる方)が中国大陸に旅行され、中国の鉄道(北寧鉄露局)の総裁(故「陳覚生」氏)の夫人「陳鮑薰」女史に「仏教精神による女学校を経営してもらいたい」との申し出(遺産四十萬元の寄付)を受けられたことから、学園設立の構想が始まります。

お裏方に同行していた東本願寺宗務顧問(元宗務総長)「阿部恵水」氏の下で財団が設立され、北京には「覚生女子中学校」が設置されました(第二次世界大戦後の中国大革命以後は「北京師範大学付属実験中学」) 高等学校になっています。私も数年

建学の理念

前に訪ねたことがあります)。その一年後には、日本(京都)にも仏教(真宗大谷派)系の女子学園を創立する構想が進められ、東本願寺や和歌山の会社社長、その他多くの人達から多額の寄付が寄せられ、「財団法人・光華女子学園」が設立されました。昭和十四年九月十五日に国(政府)から学園設立の認可が降り、翌年四月に旧制の「高等女学校」が開設されることになりました。当時は、太平洋戦争が始まる直前であり、日本は明治以降富国強兵政策を進め、朝鮮や中国に軍隊を送って戦争をしていましたから、若い青年・成人男子は徴兵されて、あるいは軍属として中国大陸に送られていました。また、戦前は、封建的な家族制度の下で、男尊女卑の思想が強く、男が優れていて女子は劣っており、社会に出なくて主に家庭で家事をし、余り勉強しなくてもいいと考えられていましたから、高等教育を受ける女性は稀な状態に置かれていました。最高学府であった帝国大学の入学資格(例外的な東北帝国大学を除いて)は女子には認められてさえいませんでした。そういう状況の中で、多くの男性が戦場に駆り出された後は、女性の果たす役割りも重要になり、女性に対する教育、特に科
学教育が必要であることが認識されて、高等女学校(後には専門学校も)の設立が構

想されたのでした。したがって、最初の建学の理念の中には、一つには「仏教精神にもとづく教育」を行うこと、二つには「女子教育」を行うことの二つが含まれていることになります。さらにつけ加えれば、当時としての「高等教育」といふ願いも込められていたと思います。

学園の総裁には、大谷智子お裏方、理事長には大谷瑩誠という方（眞宗大谷派夾輔）がなられ、理事には阿部恵水宗務顧問、由良浅次郎染料会社社長、松井庄七京都ホテル取締役などがなられました（『五十年史』p.44）。その後は、理事長、校長（学園長）、理事など学園経営の中心的な役職は、主として阿部家（阿部恵水氏のお寺であった、東本願寺眞宗大谷派の「等観寺」）の人達及びその関係者が勤められ、今日に至っております。ということから、この学園は東本願寺（眞宗大谷派）系の「仏教精神にもとづく教育」をする学園であるということになります。

東本願寺というのは、先ほどもお話ししましたように、浄土眞宗（大谷派）の総本山であります。では「浄土眞宗」あるいは単に「眞宗」とも呼ばれる宗派はどんな宗派なのでしょうか。その宗派の教えを正確に説明することは今の私にはでき兼ねます

建学の理念

が、宗派そのものについては鎌倉時代の「親鸞聖人」(一一七三―一二六二)の教えを信奉する人達の集団であると一応言うことができます。その教えの中心には「阿弥陀如来」が据えられており、それを信じて「南無阿弥陀仏」(六字名号)の念仏を称えるところに特徴があります。お寺や大きな寺院に行くと、いろいろな仏像が安置してありますが、仏(像)の位(くらい)には「如来」・「菩薩」・「明王」・「天」などがあります。それらの中で一番位の高い仏様が「如来」で、「大日如来」・「釈迦如来」・「阿弥陀如来」・「薬師如来」などがあります。「如来」というのは、文字通り「来るが如く」(あちらから来るように)という意味であり、「仏様を信心すれば、仏様の方から私達の方に来て私達を救って下さる」ことを表しています。眞宗は「阿弥陀如来」(無量寿||無限の寿命、無量光||無限の知恵)を信じ、ひたすら仏を念じる(「南無阿弥陀仏」を称えること)によって、生きとし生けるものの平安(本願)が成就され、極楽往生ができると説きます。「本願寺」という呼び方はそこから来ている名前だと思えます。阿弥陀如来を本当に心から信心すれば、阿弥陀如来がこの世を照らして我々を救って下さるというのがその教えであり、阿弥陀如来こそ眞実であり、それを

信じる心が「眞實心」であります。

親鸞聖人はその眞實を見られた(眞實を悟られた)というので、ずっと後に「見眞大師」という謚(おくりな)を天皇から贈られました。四月八日の本山参拝のとき、「御影堂」の大広間の正面の上の方に「見眞」という大きな額が掛けられていたのに気づいた人がいますか？ 浄土眞宗は、眞實を見る、眞實を見つめる、その眞實(阿彌陀如来)この世を照らす無限の寿命・無限の光明、「いのち」とその智慧)の存在を信じる宗教という意味で「眞宗」と名づけられているのだと思います。私たち現代人は、どうしても物事を理屈で考え、科学的に理解できなければ信じようとしませんから、阿彌陀如来を信じて「南無阿彌陀仏」と称えれば救われますよとか、極楽浄土へ行きますよとか、往生できますよとか言われても、なかなか信心することができません。私自身もそうです。極楽とか、往生とか、浄土とか言われても、にわかには信じることができないのです。でも私たちは、私たち自身の力を超えた、何か超越的な大きな力によって生かされているのだと考えることはできます。確かにそういう力が私たちに働きかけているのだと確信することができれば、それが信仰であり、信心に

建学の理念

もなるのだと思います。私たちの存在のすべてをそういう廣大無辺の無限の力(阿弥陀仏)にゆだねることができれば死んだ後も救われると考えることができ、あるいは安心して心安らかに死ぬこともできるのであろうと思います。

ところで、東本願寺と同じくらい大きなお寺が東本願寺(通称「お東さん」)の西側のすぐ近くにあり、西本願寺(通称「お西さん」)と呼ばれています。これはどういう関係にあるのでしょうか。西本願寺も親鸞聖人を宗祖と仰ぐ浄土真宗(本願寺派)の総本山であり、教義はほとんど同じものです。建物は東本願寺の方が大きい、世界一の木造建築なのですが、末寺や門徒の数は現在では西本願寺の方が多く聞いています。元々一つだった本願寺が二つに分かれたのは、徳川家康の宗教政策によるところが大きいと言われます。家康に限らず、戦国時代の乱世を生き抜いて天下を取ろうとした武将たちは、仏教徒、特に真宗門徒の抵抗(一向一揆)にあつて、苦戦します。織田信長は、比叡山(延暦寺)を焼き打ちにしたり、石山本願寺(後の大阪城付近)を攻め立てたりしましたが、本願寺(親鸞聖人から数えて十一代目の顕如上人が門主)は十一年間にわたって信長に抵抗します。これは「十一年戦争」とも「石

山戦争」とも呼ばれています。結局、本願寺は信長に負けて南の方（和歌山方面）に撤退して、信長と和解します。やがて信長が明智光秀に殺された後、天下を取った豊臣秀吉は、顕如上人の長男「教如上人」に京都の土地を与え、ここに本願寺を造営させます。しかし、教如上人は間もなく秀吉によって門主の座を追われ、その弟（顕如上人の四男）の「准如上人」が門主となります。このお寺が今も続いている西本願寺の方です。やがて秀吉の死後天下を取った家康は、浄土真宗が肥大化するのを警戒して、秀吉によって退位させられていた教如上人に土地を与え、そこに東本願寺を造らせます。ここから東西両本願寺の二系統が相並ぶことになったわけです。現在東本願寺が直接経営する大学は大谷大学と九州大谷短期大学の二つだけですが、間接的に東本願寺系のお寺が経営している学園は光華女子学園の他にも沢山あります。高校では大谷高校が東本願寺系の直営校です。なお、西本願寺系の大学や高校としては、京都女子大学と龍谷大学及び平安高校があります。

二、仏教及び仏教精神

それでは光華女子学園がその建学の理念とする「仏教精神にもとづく教育」とはどのような教育を言うのでしょうか。

映画やテレビを見てみると、どのような民族、どのような種族にも、何か宗教的なもの、祈りの儀式といったものを持っている様子の映し出されることがよくあります。人がこの世に生を受けて長い一生を生きて行く間には、いろいろな苦しみや困難な状況に出くわすことになります。人の力ではどうすることもできない大きな困難な状況に置かれた時、人は何かに頼り、何かに祈る気持ちになります。特別の信仰を持っていない人でも、困った時、行き詰まった時には、「神様助けて下さい」、「仏様、何とかして下さい」と祈りたい気持ちになります。それが宗教的なものにつながっていくのだと思います。矛盾に満ちた現実の世界をよりよく生きるために、あるいは自然の・社会的な苦難・苦渋・不安を逃れるために、人々は人の力を超えるもの、超越的

なもの、絶対的なもの、神秘的なものに救いを求める気持ちになります。そこに宗教が生まれてきます。私の生家は真言宗（弘法大師の始められた宗派）ですから、家の宗教を受け継いでいると考えれば、私も真言宗の門徒ということになるのかもしれないが、私自身はそう思っていないし、仏教の信者であるとも思っていない。ましてキリスト教徒でもなければ、イスラム教徒でもありません。特定の宗教・宗派に関わりはありませんが、それでも私自身の心の中に何か宗教的なものや宗教的な考え方は持っていると感じています。それにもとづいて、神様（キリスト教、神道、その他）や仏様（仏教や仏教的なもの）について私独自の捉え方をしているように思います。つまり、誰にでも、あるいはどんな民族、どんな種族にも、それぞれの信仰の対象があるのだと思います。それをどのような形で表現するかはそれぞれの考え方によって違います。この学園は真宗系の学園ですから、このホールの壇の上に「南無阿彌陀仏」という御本尊を仏殿として飾っており、儀式時には先程のように「総礼」という御挨拶で「合掌」をし、「三帰依文」を称えることになっています。真宗では「合掌する」のはお祈りするのではなく、仏様に対して「感謝」の気持ちを表してい

建学の理念

るのだと言われます。私たちは「阿弥陀如来」という仏様によって生かされていると
 考え、そのことへの感謝の気持ちを表すのが「合掌」の形をとるといことです。形
 によって表すやり方は宗教・宗派によって多様に変っています。儀式の仕方も違いま
 す。でも、人類には、どんな集団、民族、種族にも、それぞれの信仰の対象があるの
 が普通です。

宗教は、別の言葉で言えば、神とか仏とか、超越的なもの、絶対的なもの、神秘的
 なもの、人間の力ではどうしようもないもの、私たちの力を超えたものにつながって
 いるのだと思います。それを神と言うか、仏と言うかは別として、私たちが一生懸命
 努力してもどうしようもできない力が働いていて、私たちが支配しているようにも感
 じられます。それは人知を超えたものであり、絶対的なものであります。その絶対的
 なもの、超越的なものが、神であり、仏であります。でも、神と仏は全く同じもので
 はありません。神は完全に超越的・絶対的な存在（絶対の世界のもの）であり、私た
 ち人間（相対的世界に住む者）とは直接的なつながりがありません（キリスト以外は）
 が、仏は人間が悟りを開けばそこに至ること（成仏）のできる存在であると考えられ

ます。神というのは人間界（相対の世界）から切り離された文字通りの「絶対者」（絶対の世界）であるのに対して、仏というのは人間の世界（相対の世界）をも包み込んでいる、あるいはそこに連なっている絶対の世界なのだと私は考えています。仏の姿（仏像）が人の形をしているのはそのせいだと思います。話が難しくなりましたから、もっと別の考え方をしてみましよう。

皆さんの中には「神様がいると思いますか」と問われると、「そんなものはない」と答える人が多いかと思えます。でも中には「いる」と答える人がいるかもしれせん。私も「神様が人間と同じ形をして存在しているか」と問われれば、「そんなものはない」と答えます。でも、この宇宙や地球をも含めて、私たちの一切を包み込んでいるものが何かあって、それが私たちに作用している、何らかの力を及ぼしていると考えerことはできます。私はそれを「宇宙の力」と考えていますが、そういう力が神様、仏様につながるものだと考えることもできます。でも、そういうことは信じられないという人も一杯いると思います。それはそれで結構であり、それは信仰の自由ということであります。したがって、世界には仏教のほかにも実に沢山の宗教・宗

建学の理念

派・宗教的なものがあり、また無宗教の人・無神論の人もいるわけです。

仏教は、今から二千五百年ほど前に、インドの北部、ヒマラヤ山脈のふもとの地方（ブツダガヤ）に住んでいた「釈迦族」という種族の王子であった「釈尊」（日本での尊称は「お釈迦様」）が始められた宗教です。釈尊は二十九歳までは王宮で何不自由のない暮らしをしていましたが、次第にこんな生活をしていてはいけないと考え、ようになり、二十九歳の時に王宮を出て修行の道に入ります。数年間の苦しい修行の後、三十五歳頃、真理に目覚めて悟りをひらきます。その地方の言葉・パーリ語、あるいはサンスクリット語で、「目覚めた」という意味のことをブツダと言うそうです。そこで目覚めた後の釈尊の名前をゴータマ・ブツダ（悟りを開いた人）と呼びます。「仏陀」は後にブツダを漢字に直したものであり、仏陀の教えを「仏教」と呼ぶようになります。仏陀は、自ら悟ったところを多くの人達に伝えるために、あちらこちらと教えて歩きます。その教えを聞いた多くの弟子達がさらに多くの人達に伝え、あるいは教え歩いて、それらが後に文章にまとめられたものが多くの経典（般若経・法華経・浄土三部経・華嚴経・大日経など）です。経典の多くは、中国語（漢語）に

翻訳され、やがて日本にも伝えられてきました。

日本には仏教は西暦五五二年に伝来しましたが、当時の日本における仏教の興隆に大きく寄与されたのは聖徳太子（一六二二）であり、その遺徳を偲んで、この学園でも「太子忌」が行われています。奈良・平安時代には、最澄（伝教大師、比叡山「天台宗」の開祖、七六七―八二二）と空海（弘法大師、高野山「真言宗」の開祖、七七四―八三五）がともに中国にわたって修行を積み、帰国後わが国における仏教の布教に尽力しました。やがて、鎌倉時代には、続発する戦乱や疫病の流行で混乱した時代背景の中で仏教の革新が唱えられ、法然上人（円光大師、浄土宗の開祖、総本山は京都の知恩院、一一三三―一二二二）、親鸞聖人（前出）、栄西（千光国師、日本臨済宗の開祖、建仁寺の開山、一一四一―一二二五）、道元（承陽大師、日本曹洞宗の開祖、永平寺の開山、一一〇〇―一五三三）、日蓮上人（立正大師、日蓮宗の開祖、総本山は山梨県身延山の久遠寺、一二三二―八二二）などが活躍します。旧来の仏教に対して、これらは新興宗教ということになりますが、新興宗教は世の中が混乱して、民衆の生活が不安定になっている時に頻出し、栄えます。現実の生活に苦しむ民衆が神や仏に救

建学の理念

いを求める気持ちになるからです。鎌倉時代に生成したこれらの新興宗教は、その後の室町時代や戦国時代の民衆の中にも次第に根を張って、それぞれの地歩を固めて行きます。これらの多くの宗祖の教えはその後多様な展開をした結果、現在の仏教の主な宗派は十三あると言われています。

法然上人や日蓮上人が「上人」と書かれるのに対して、親鸞聖人の方は「聖人」と書かれます。何故そうなのかは分かりませんが、親鸞聖人はそれだけ尊敬されている人なのかと思います。親鸞聖人は、浄土宗の開祖とされた法然上人の弟子の一人でしたが、念仏を何回でも称えることを説いた法然よりもっと徹底して、念仏（南無阿弥陀仏、六字名号）を一回称えるだけでも、真に阿弥陀仏を信じて称えれば、特別の修行をしなくても、誰でも救われる、悪人でさえも往生できる・成仏できる・極楽へ行けること（悪人正機）を説いたと言われ、それだけ多くの民衆が受け容れ易いので、後に広く普及していくことになりました。一生懸命修行したり、日夜お勤めに励むのでなければ救われない、往生できないと言われると、そういうことのできる人（お坊さんや特別に修行をする人）だけしか救われないことになり、民衆の間には余

り普及していかないことになります。そういう宗教や仏教では意味がないということになります。親鸞聖人の「悪人正機」は、そうではなくて、悪人（普通の人、凡夫）でも仏を信じて念仏を称えれば救われる、本当に阿弥陀如来を信じて「南無阿弥陀仏」と称えれば往生できる、本当に信心して一言念仏を称えるだけで極楽にいけるということを説いたものです。

親鸞聖人の教えの中には、このほかに本願（生きとし生けるものの平安）は他力（阿弥陀如来の力）によってのみ成就できるとする「他力本願」と言われるものがあります。自ら修行を積んだり一生懸命お経を称えたりするのは自力によって本願を達成しようとするのです。他力本願というのは、そんなことをしなくても、仏様を本心に信心すれば仏様の方から救って下さるということです。他力を仏様の力であると解釈すると、他力本願というのは、本当に信仰すれば、仏様が向こうからやって来て我々を救って下さる、本願が達成されるということでもあります。そこで一番大事なことは如来を信じるということになります。でも、このところは私自身が未だ十分理解できておらず、旨く説明できません。最近では世紀末ということ将来に不安を持つ

建学の理念

ている人も多いらしく、本屋さんに行けば宗教関係・仏教関係の本が一杯並べてありますから、その中から眞宗関係の本を買って勉強してみてください。

さらに、前にも少し触れましたが、親鸞聖人の言われたこととして、阿弥陀如来の心こそ眞実の心であるとする「眞実心」という言葉があります。この眞実心は光華女子学園の「校訓」ともされています。「眞実心」は阿弥陀如来こそ眞実であり、それを信じる心(信仰心)をいうのでありますが、それがにわかには信じられない人は、とにかくこの宇宙に眞実があることを信じる心、あるいは本当のことを求める心、眞実を求める心、さらには誠の心、誠実さを大切にする心などと読み替えて考えることもできるかと思えます。「眞実を見つめる心」と言い換えてもいいかもしれません。

ともあれ、法然上人の教えは「浄土宗」となり、親鸞聖人の教えは「浄土眞宗」または「眞宗」となって、後々大きく栄えていきますが、最初は当時の既存の仏教徒に受け容れられず、時の権力から弾圧されることになり、法然上人は四国へ、親鸞聖人は新潟県国府(今の上越市)へと流されることになりました。

そのことをお話しする時間はもうありませんので、次に浄土眞宗を含む「仏教の精

神」とはどのようなものかを考えてみましょう。

「仏教精神にもとづく教育」の仏教精神とは、仏教の教え＝仏陀（釈尊）の教えにもとづいて教育することになります。それはなかなか大変です。先程もお話ししましたように、仏陀の説かれたことを記録した経典はものすごい量ですし、漢字で書かれていますので読んで理解するのも大変です。仏式の葬式や法事の時にはお経があげられますが、意味はさっぱり分かりませんね。お坊さんがその内容を説明して下さるといいのですが、一般にそういうこともされないのです。お経が何を言っているのか分かりません。私自身は経典を読んだこともありませんから、これまでに仏教のお話を聞いたり、本を読んだりしてきたことから、私なりに理解している仏教の精神と思われるものをまとめてみると、次のようになるのではないかと思います。

我が国では、よく「和」ということが強調されますが、この「和の精神」そのものが仏教精神ではないでしょうか。昔我が国における仏教の普及に大きな貢献をされた聖徳太子は「和をもって尊しとなす」と言われたそうです。これはそれ以前の中国の高僧の言葉の中にもありますから、人は皆喧嘩をしないで仲良く暮らして行くよう

建学の理念

に努めるべきであるという考え方が仏教思想の根本にあると思います。次に、仏教では「慈悲」ということがよく言われます。慈は樂を与えること、悲は苦を除くことを意味すると言われますから、慈悲は人に楽しみや喜びを与え、人の苦しみや悲しみを取り除くようにすることであります。これは仏様が私たちを慈悲の心で救って下さるということでしょうが、それだけではなく私たちも「いのち」(人の「いのち」ばかりではなく、他の動物や植物の「いのち」)を大事にしましょうという意味が含まれていると思います。慈悲とは他者、他の生き物(いのち)に対する「慈しみの心」あるいは「思いやりの心」であると言ってもいいかもしれません。また、仏教、特に真宗では「報恩感謝」ということがよく言われます。これは仏様に対する報恩感謝ということを言っているのですが、私は次のように考えています。私たちは基本的には自分自身で生きています。一人ひとり「いのち」をもらって、一生懸命生きています。でも、どんなに一生懸命頑張っても、どうすることもできない場合があります。突然病気になる。あるいは、交通事故に遭いたいと思っている人はいませんが、突然交通事故に遭うかもしれない。苦しいこと、悲しいこと、不幸な目にも遭うかもしれ

ない。そういう目に遭わないで幸せに生きているということはそういうことから逃れて生きているということ。自分の意思ではなく、何かに生かされているということでもあります。また、自分一人の力で生きていると思っても、そうではないのです。人は食事をしなければ生きて行けません。皆さんも、多くの人がお父さん・お母さんからお金をもらって、それで食事をして生きています。自分でアルバイトをしてそのお金で食べているという人も、食事を提供してくれる人がいなければ食べることができません。食べ物を生産し、食卓まで運んでくれる人たちの働きがあるから、食べられるのです。私たちはそういう多くの人たちのお陰で生きているのですから、それらの人たちに感謝をしなければなりません。また、私たちが口にする食べ物の多くは、他の動物や植物です。仏教は「いのち」を大切にし、殺生をしてはいけないと教えていると思いますが、動物は他の生き物を食べなければ生きて行けません。仏教徒は、生き物は殺さず、動物は食べないと言っても、植物を食べないわけには生きません。そこに絶対的な自己矛盾があります。動物である人間は、そのような自己矛盾を抱え、宿命を背負って生きています。できるだけ無駄な殺生はしないようにしなけ

建学の理念

ればなりません。他の動植物を食べなければ生きていけません。そういう意味では、私たちは私たちの食事のために犠牲となる動植物に申し訳ないという贖罪の気持ちを持ちながら、感謝しなければなりません。そのお陰で生きています。そのほかにも、太陽の光があるから生きています。清浄な空気や水があるから生きています。ですから、そういう自然に対しても、感謝の気持ちをもって生きなければなりません。仏教はそういう意味も込めて万物に対して、またその大本にある仏様（如来、自然の摂理）に感謝することを教えているのだと思います。そして、仏教は、ただそれらに感謝するだけではなく、他の人たちや動植物、あるいは自然に対して、感謝の意味を込めて「奉仕する」（報いる、大事にする）気持ちを持つように教えていると思います。お釈迦様（釈尊）は、一切の欲を捨てること（無欲・無我）を説いておられると思います。私たち凡人は、すべてを捨てて無我になることはとてもできませんが、できるだけそういう精神で人のために尽す、人に奉仕することとは大事なことだと思えます。

先程ご紹介した大谷智子お裏方の歌に「同朋の歌」というのがありますが、そこに

は仏教（真宗）の精神がよく表現されていると思いますので、ここで少し説明させていただきます。

第一節「はかりなき命たまひしよろこびは、御名よぶごとにいやあらたなり」は、南無阿弥陀仏という御名を呼んで念仏を称えるたびに、無量寿（無限のいのち）をいただいて生かされている喜びが湧いてくることを歌って「感謝」の念を表し、第二節「すすむ世にあやまたぬ道ふみゆかむ、御のりのままにみちびかれつつ」は、仏のみ教え（真実である法、法則）に導かれながら、この世の中を過ちなく生きて行きますようと歌って、どちらも仏教（真宗）に対する帰依（信心）することの大切さを表しています。第三節では「うち揃いむつみあひつつへだてなき、慈悲あふがんな家のうちそと」と、先程述べました「和」（家の中でも外でもお互いに分け隔てなく仲良くして行くこと）と「慈悲」（慈しみの心・思いやりの心）をもつことが大事であることを歌い、第四節では「人のため世のためなさけつくさずば、めぐみに生くるかひやなからむ」と「奉仕」の精神で生きて行くことの有意義さが歌われています。ついでに言うならば、仏教に限らず、一般に宗教では、私たち人間の力（人知）を超えた超

建学の理念

越的な力を畏れ敬う心（敬虔な心）を持つことを教えますから、仏教（真宗）も宗教である以上、絶対的なものの存在を信じてそれに対する「畏敬の念」をもつことをその基本に据えていると思います。これらのことから、仏教精神にもとづく教育とは、仏教の教義に従って、①超越的なものに対する「畏敬の心」、②他者に対する「慈悲（思いやり）の心」、③他者によって生かされていることへの「感謝の心」と、④他者に対する「奉仕の心」、さらには⑤他者を尊敬し、互いに相和して行く「（敬）和の心」などを持たせるように教育する精神教育・人格教育のことであると言えるのではないかと思います。本学園では、基礎教育・教養教育・専門教育などと並んで、あるいはそれらとともに、このような仏教精神が浸透して行くこと（これを「薫習クンジュウ」と言います）が求められているのだと思います。

このような仏教精神にもとづく教育を押し進める学園として、その名前はお裏方によって「光華」と名づけられました。その由来は先の『五十年史』の中に記されていますが、浄土真宗の經典とされる浄土三部教の一つ「仏説観無量寿經」の「水想観」の一節（「其光如華又似星月」）から光と華をひき出したものです。浄土の世界では心

地よい音楽が奏でられ、きれいな花が咲き乱れ、夜の星や月がきらきらと輝くようにいろいろな光りが輝いていると考えられています。そのことから『五十年史』では「清澄にして光り輝くおおらかな女性を育成」することが光華女子学園の教育目標であるとされています。これを別の言葉で言い換えれば、「光り輝く華のように美しい女性を育成する」とか、「仏教精神による知性と品性を備えた明るい女性を育成する」ことを教育目標にしていると言うこともできるでしょう。

いずれにしても、光華女子学園は、創設当時の時代背景から、「女子学園」として創設されましたから、仏教精神にもとづく教育と同時に「女子教育」を推進することをその基本使命としております。戦後は時代が変り、憲法の民主主義・平等主義・教育の機会均等思想の普及に伴って、女性の社会的進出も目覚ましく、女子の高学歴志向・共学志向が高まり、女子教育の必要性とその存在意義が疑問視されるようになってきましたが、本学園が女子学園であり続ける以上、女子教育の功罪についても十分検討しながら、「母性教育」・「女性尊重教育」・「女性指導者育成教育」などを主たる教育目標に据えていくことは可能であると考えます。

二、仏教と宇宙哲学

仏教は私たちの死後のことや現世における人の生き方について教えている宗教だと思えますが、その背後には宇宙の捉え方に関わる哲学が含まれていると思われそうです。宇宙哲学とのつながりについて考えてみたいと思います。

浄土真宗の御本尊は「南無阿弥陀仏」であるとされています。その意味を分析してみると、南無は「帰依します」、「阿弥陀」はサンスクリット語、あるいはパリー語（仏教が生まれた地方の言葉）で Amitābha とか、 Amitāyus を漢語にしたもので、無限の寿命（無量寿）とか、無限の光明（無量光）を意味するとされますから、「南無阿弥陀仏」は無限の光り（仏教では知恵・智慧と解釈されています）によって無限の命（寿命）を育んでおられる仏様（阿弥陀仏）を信じます、ということになります。これをもっと分かり易く解釈すると、「無限の命を信じます」「阿弥陀如来によって生かされている無限の命を信じます」（あるいは無限の光り（智慧）によって無限に生

き続けている「いのち」を信じます」ということになるでしょうか。

現在までに明らかにされている宇宙科学の説明によると、今から約百五十億光年（プラス・マイナス三十億光年の誤差があるとされます）くらい前に、大爆発（ビッグ・バース）が起こって宇宙が誕生したと言われます。しかも、それは無から起こったと言われますが、それは間違いだと私は思います。目には見えない何物か（非物質）例えば、宇宙の力、エネルギーなどがあつたはずです。また、現在の宇宙はものすごい勢いで膨張し続けていると言われます。では宇宙の外には何があるのでしょうか？ やはり何らかの空間がなければ宇宙は広がり続けることはできないはずですよ。すなわち宇宙の広がりには内にも外にも無限（果てがない）と考えられます。それが神の世界であり、仏（如来）の世界であり、また非物質の世界であつて、我々人間には見たり感じたりすることのできない絶対的なもの・超越的なものでもあります。それが無の世界であると言うのであれば、ビッグ・バースが無から起こったということも分かります。

この宇宙が膨張し続けているということはすべての物が動いているということであ

建学の理念

りますし、宇宙の星は集団となつて、あるいは個々に、動き回っています(星雲も、銀河系も、太陽系も、太陽も、地球も、月も)。また、地球の上に住む人間も、動物も、動き回っています。さらに植物や鉱物さえ動いているのです。それらを構成している物質を小さく分析して行くと極微の粒子(電子・陽子・中性子など)で構成され、それらも動き回っているとされるからです。遠い昔、ギリシャで「万物は流転する」と言つた哲学者がいましたが、現代のように科学が進歩していなかつた時代にそのように断言したことはすごいことだと思います。

仏教でも、「輪廻」・「諸行無常」・「生者必滅」などと言ひ、この世の中で変らないものはない、すべてのものは時とともに動き、変つていくと言ひますから、それも宇宙の眞理・眞実を言い当てていることになります。そして宇宙が動き、万物が動いているから「時間」があるのです。宇宙や万物に動きがある限り時間は無限に、永遠に続くことになります。先程言いましたように、膨張し続けていると言われる宇宙の向こうにも「空間」がなければ宇宙は広がりようがないので、宇宙の外にも空間があり、それをも宇宙と呼ぶなら、宇宙には果てしがないのであり、無限なのです。こうして

時間にも空間にも限りがない宇宙の中で、「いのち」は生き続けていることになりま
す。

この宇宙は無限の時間・空間の中でその中に存在している「物質」と「非物質」
（目に見えないもの・容積を持たないもの）が相互作用によって様々な動きをしてい
ることになりますが、「いのち」はその相互作用の中から生み出されて、物質（植物
や動物）に宿っている非物質的なものであり、絶対（超越）の世界を求めて生き続け
ている、意思をもった存在であります。「個体」としての生命・生物は「生病老死」
の過程をたどって消滅しますので、有限ですが、その元になる「いのち」そのものは
すでに何億年という長い歴史を生き続けて、霊長類としての人間にまで進化してきま
した。今後どこまで生き続け、進化し続けるかはその叡智（英知・知恵）にかかって
いますが、無限の智慧（知恵）の光明に救われて永遠に生き続けるというのが仏教
（真宗＝無量寿経）の教えだと思えます。この「いのち（の元）」は永遠である。生き
続けるのだ」という「阿弥陀仏」・「阿弥陀如来」を信じる（南無する）ことができれ
ば、あるいはそれを信じて「南無阿弥陀仏」と称えることができれば、個体としての

建学の理念

「死」は怖くなくなるのではないでしょうか。それによって心の平安（悟りの境地、涅槃^{ネはん}、超越の境地）が得られるのではないかと思います。個体としての自分が死んでも、自らに連なる「いのち」そのものは永遠に生き続けていると信じていることができれば！ 最近では、悲惨な事件が多く、世紀末的な状況が続いています。私たちが一人ひとりが自分だけのことを考えないで、自分の命が大事であるように、他の人の命も大事であり、さらに他の生物の命も大事であるという自覚を持って、「いのち」のつながりが理解でき、体得することができれば、そのような事件も少なくなるのではないのでしょうか。そのためには、仏教精神にもとづく心の教育を盛んにして、少しでも多くの人が「心豊かな人」になれればいいと思います。

—二〇〇〇年四月二〇日—